

2020年7月1日

博士学位審査 論文審査報告書（課程外）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 岩崎 美奈子
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 自己の発達における重要他者の意義—移行対象を媒介にして—
論文題目（英文） Significance of significant others in self-development: Transitional objects as mediators

公開審査会

実施年月日・時間 2020年6月25日・10:00-11:00
実施場所 Zoomミーティング

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	井原 成男	文学修士（心理学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	外山 紀子	博士（学術）	東京工業大学	発達心理学

論文審査委員会は、岩崎美奈子氏による博士学位論文「自己の発達における重要他者の意義—移行対象を媒介にして—」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 移行対象も自己開示も個人内要因が関係していると考えられ、移行対象の所有の有無だけでなく、別の要因が自己開示に影響を与えているのではないか。パーソナリティ特性などの潜伏変数は排除できるかという質問について、申請者から、パーソナリティ特性などは指標として収集していないが、因果関係については明確に断言できないことを今後の課題として加筆したいとの回答があった。
- 1.2 誰にでもオープンに自己開示をするのは問題なので、自己開示については言葉を補う必要があるという指摘に対して、開示内容による差が有意に見られた、性に関する話題は危険が伴うことも多いので家族にのみ開示できるというのはポジティブな意味もあるとの回答があった。
- 1.3 症例では経過のなかで自然と移行対象は現れるのか。幼少期以降に初めて発現した移行対象についてはどう考えるか。また、移行対象は発達の過渡期にリバイバ

ルするののかという質問に対して、本研究の症例に限定すると物としての移行対象は現れなかったが、入院中に遊んだおもちゃで退院後も継続して遊ぶなど移行対象が現れる場を継続して持ち続けることはあった。語りによる結果から、頻繁に移行対象が使われる時期とそうでない時期があり、発達の過渡期にリバイバルすると考えられるとの回答がなされた。

- 1.4 言葉が移行対象となると考えられるのではないかとの質問には、自己感を定義したスターンは言語的自己感の中で「寝床でのお話」が移行対象であることを報告しており、言葉が移行対象となることもあると考えられるとの回答がなされた。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 移行対象の所有の有無だけでなく、別の要因例えばパーソナリティ特性などの潜伏変数が自己開示に影響を与えている可能性は排除できないので、それについても今後の課題などに加筆してほしい。

- 2.1.2 誰にでもオープンに自己開示をできることは問題だと思うので、自己開示した方が良いということについては言葉を補う必要がある。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 移行対象の所有の有無だけでなく、別の要因例えばパーソナリティ特性などの潜伏変数が自己開示に影響を与えている可能性は排除できないので、本文の該当箇所に加筆する他、最後の課題にさらに加筆された。

- 2.2.2 誰にでもオープンに自己開示をできることは問題だと思うので、自己開示したほうが良いと言う指摘については、本文の該当箇所に加筆する他、最後の課題にさらに加筆がなされた。

- 2.2.3 その他、定義の問題、治療過程で移行対象が自然に現れるかどうかの問題、乳幼児期の移行対象と青年期まで延長される移行対象、移行対象と言語等の質問事項については論文の該当箇所でも適宜加筆等がなされた。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：自己の確立が困難な現代にあつて、重要な他者との関係によって出来上がっていくものとして自己を定義し、その関係が可視化され客観的に観察され、また調査できる移行対象（例えば手放せない毛布やぬいぐるみ等）の機能を客観的・主観的に明らかにし、それを心理治療に応用するという明確な目的を持つと考える。

- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：可視化可能な移行対象において自己開示を、対人関係を行うための機能を持つものと考え、①移行対象と自己開示の関係をそれぞれの発現率から客観的・統計的に捉えている。質問紙は予備調査でその使用の妥当性を確認・改変し、本調査で使用するという確実で方法論的に妥当なものである。②また、その客観的な方法で詳細が明らかに

ならなかった移行対象の持つ機能を、質的方法の代表的なものである GTA (Grounded Theory Approach) を使用し、明らかにしている。これによって、物であると同時に子どもの内面的な意識も併せ持つ移行対象の特質を生かして、重要な他者との間で何が自己の確立のために機能しているのかを明らかにしている。③さらに可視的である移行対象使用者の語りから明らかにされた人との関係における重要な関係性のポイントを実際の治療に応用するという計画の一貫性と妥当性を持つと考える。

- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：移行対象と自己開示の関係性に限定せず、自己開示の内容の違いの特質を丁寧に論じている。自己開示は将来の問題など比較的通常の間人間関係において開示されるものであり、性的な問題等は家族とそれ以外のものでは差異があるなど、内容とその特質など丁寧に押さえられている。またそこで明瞭にならなかったものを、自己の内的な意識に関係するものとして追求するという質的研究方法への発展のさせ方は、客観的な方法を質的方法で補う意味を明確にしている。さらに客観的・内的意識として明確にされた事実を、さらに大きな枠組みにおいて重要な他者との関係で重要なものと捉え、重要な他者との間で自己の確立に問題を持つ親子に対して母子臨床の実践的な場面に応用し実証している。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 これまでに臨床的に語られることの多かった移行対象を、自己の確立という軸によって客観的手法を使って明らかにしたこと。さらにそれを内的意識の面から知るために、明確な方法論的意識を持って質的な方法と繋げることで、客観的で量的な方法と質的で内面的な方法をリンクさせたこと。
 - 3.4.2 客観的な方法ではその量的な面しか分からなかった移行対象という現象を、厳密に GTA の方法論を駆使することで、量的方法を質的に補うという方法論を確立しようと試みたこと。質的方法は現在も進化し続けている方法であり、その最新の技法も取り入れた分析になっている。その点で、心理的な現象を量と質両面から追求した臨床的により応用性の高い知見の発見に近づくものである。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 移行対象という現象を幼児期のみでなく青年期まで広げ、また自己との関連から論じていること。
 - 3.5.2 発達心理学では従来から大きなトピックとして認識されながら、その現象面しか知見が得られなかったテーマを、客観性を担保することを目指す GTA という質的方法に明確につなげながら使用者の内的な意識を明確にすることで、この現象理解の範囲と深さを広げたこと。
 - 3.5.3 これまで個々にあまり実証なく論じられてきた問題を総合的に理解すべく、「重要他者との関係から作られていく自己」という概念を提出し明確にできたこと。

- 3.5.4 自己というこれまで狭く論じられてきた概念を、広く他者との関係という受け入れやすく現実的な概念として再構築し、それが理論的にも実践的にも有効であるという方向性を示したこと。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 重要他者との関係で自己がいかに形成され確立されていくかという、人間科学において重要であり汎用性の高い概念を、移行対象という具体的な現象から提示した。
- 3.6.2 客観性と内的な個々人の意識双方が重要であると考えられる人間科学の一つの方法論を提示できた。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- ・岩崎美奈子：2016 移行対象の研究史と展望—移行対象概念の曖昧さに関する一考察—。お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢，18巻，79-88頁。
 - ・岩崎美奈子，井原成男：2020 青年期女性の語りにみる移行対象の心理的役割の変遷—手放されない移行対象に焦点をあてて—。質的心理学研究（印刷中）
 - ・岩崎美奈子，山崎知克：2015 母子関係への介入による神経性無食欲症の治療効果。子どもの心とからだ，24巻3号，280-288頁。
 - ・岩崎美奈子，山崎知克：2017 親のアタッチメント・スタイルを考慮した心理社会的支援の有用性—治療継続に支障をきたした発達障害児6症例における検討—。小児の精神と神経，56巻4号，353-360頁。
 - ・岩崎美奈子，山崎知克：2020 親子の関係性がペアレント・トレーニングの効果に与える影響について。子どもの心とからだ，29巻1号，14-21頁。
- 5 学識確認：関連科目については、「大学院人間科学研究科博士学位論文（課程外）審査に関する内規」第17条第2項第三号を満たすことを確認した。また、外国語については、同内規第18条第4項第三号を満たすことを確認した。
- 6 結論
- 以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上